

## 多文化共生社会づくり推進事業報告書

### 1 委託業務名・概要

(1) 業務名 「多文化子ども探検隊 - みて、さわって、つくってみよう - 」

(2) 概要（事業の要約・事業の目的など）

本事業は、外国籍の子どもたちが主体的に体験学習を通じた活動を行うことで、日本文化や地域への理解促進や文化交流、さらに、自らの将来像を描くことと共に保護者との時間を共有することで親子の関係づくりを目標とした。

また、本事業を通じて彼らが積極的に地域の公共施設を使用する機会や、地域活動への積極的な参加を促すことで地域の多文化共生社会実現を目指した。

具体的な事業内容として、日本文化や自然環境、地域産業について学ぶため、近隣の学習施設、公共施設を利用し、また、地域の企業見学などを行った。こうした体験を通じて、子どもたちが感じたこと、学んだことなどについて記録した。

### 2 実施事業について

#### 実施時期

(1) 平成18年7月1日（土）～平成19年2月28日（水）

#### (2)実施地域

西尾市上町	(株)松鶴園	抹茶工場、抹茶畑見学
西尾市家武町	西尾いきものふれあいの里	木工作品作り、自然観察
西尾市緑町	県営緑町住宅集会所	料理教室
西尾市伊藤町	鶴城公民館	料理教室、お面作り
刈谷市朝日町	アイシン精機(株)	自動車部品工場見学
愛知郡長久手町	愛知淑徳大学	大学授業参加、交流活動、大学祭体験
愛知郡長久手町	愛・地球博記念公園(モリコロパーク)	自然体感
瀬戸市	愛知県陶磁資料館	作陶体験
豊橋市大岩町	豊橋総合動植物公園	動植物観察、博物館観覧
豊田市長興寺	豊田市防災学習センター	防災学習
岐阜県美濃加茂市	日本昭和村	自然・昔体験

(3)事業の具体的内容

- H18年7月23日 西尾市 抹茶工場「松鶴園」、抹茶畑の見学  
12名参加
- H18年8月2日 刈谷市 自動車部品工場「アイシン精機刈谷工場」見学  
長久手町 愛知淑徳大学 授業参加、大学生との交流活動  
13名参加
- H18年8月27日 西尾市 いきものふれあいの里 木工作品作り、ザリガニつり、昔のおもちゃでの遊び体験、自然観察  
13名参加
- H18年9月17日 岐阜県 日本昭和村 日本文化の学習と体験教室（木工作品作り、万華鏡作り、アイスクリーム作り、水てっぽう作り、小物作り）参加  
11名参加
- H18年10月1日 豊橋市 豊橋総合動植物園 動植物観察、博物館観覧、化石発掘体験  
15名参加
- H18年11月3日 長久手町 愛知淑徳大学 大学祭体験  
12名参加
- H18年12月16日 瀬戸市 愛知県陶磁資料館 作陶体験  
長久手町 モリコロパーク 自然体感  
17名参加
- H18年12月23日 西尾市 県営緑町住宅集会室 料理教室（お好み焼き作り、ブラジル料理試食）  
40名参加
- H19年1月21日 西尾市 鶴城公民館 料理教室（節分の太巻き作り、鬼のお面作り）  
15名参加
- H19年2月11日 豊田市 豊田市防災学習センター 防災学習体験  
長久手町 モリコロパーク 自然体感  
43名参加

### 3 実施結果（実施の効果等）

H18年度多文化共生社会づくり推進事業として、西尾市内外において様々な事業を実施したことにより、以下の効果が見られたと思われる。

第一に、本事業の目的である日本文化や地域産業、自然への理解は実施前と比べると深まったと言える。竹とんぼや万華鏡など、これらの名前も聞いたことのない子どもや、名前は知っているがどのようなものか知らない子どもたちが、実際に自らの手を使い、作り、遊ぶ過程において、どのようにして作られていくのか、どのように遊ぶものなのかを学ぶことができた。

同様に、二つの工場見学を通して、地域の産業である車や抹茶について理解を深めることができた。特に、抹茶は西尾の特産品であり、それへの理解を深めることは地域を理解することにもつながったと思われる。

自然に対しては、動植物を間近でみたり本物の化石に触れる機会など、普段では体験できないことを体験することによって、本事業は子どもたちの自然への理解促進だけでなく、新たな興味を生じさせるきっかけ作りに貢献したと思われる。

第二に、本事業は、子どもたち自身の将来像に新たな刺激を生じさせ、さらに、彼ら自身が成長することに貢献したと思われる。様々な体験を通して、彼らが多くの興味を抱くようになった。日本文化や地域産業への関心を高め、同時に、大学への訪問を通じて、大学というものをより身近に感じるようになった子どもたちが増えた。高校進学だけでなく、さらに、大学に進学することを将来の選択肢の一つとして存在することができたと思われる。

また、子ども自身の成長として、事業を通して今まで見せたことのない積極性や根気強さを見せるようになった点が大変良かった点として挙げられる。子どもたちは、訪問先で積極的に質問し、訪問先の方々から驚きの声をいただいた。わからないことは積極的に質問し、たずねられたことに関して積極的に返事をする姿は、大変素晴らしいものであった。本事業を通して子どもたちの長所を存分に発揮できたことから、自らの自信につながったのではないと思われる。

第三に、本事業を通して、子どもたちの保護者と「共生の会」スタッフの連携が強化された点が効果として挙げられる。事業の説明、チラシの配布、出席の確認作業や事業の準備を通して、保護者とスタッフの間に以前より多くのコミュニケーションが持たれ、「共生の会」の活動や子どもたちの活動に興味を持ってもらえるようになった。さらに、

活動をお手伝いしてくれる保護者が生まれ、こうした保護者とスタッフ間の連携の強化は今後の活動に大きく寄与すると思われる。

第四に、本事業を通して、子どもたちの日常生活をより詳細に知ることが可能となった。彼らがどのような家庭環境で暮らしているのか、日本語に対するニーズがどのようなものなのか、ブラジル人学校に通う子どもたちの様子はどのようなものか、子どもたちの週末の過ごし方などに対する理解が深まったことが効果として挙げられる。

第五に、本事業は日本の公立小学校へ通う子どもとブラジル人学校に通う子どもの交流の場となった点が効果として挙げられる。公立小学校とブラジル人学校のスケジュールは異なり、近年、子どもたちの年齢が高くなるにつれて、なかなか一緒に遊ぶ姿を見かけていなかった。

そうした中、事業への参加を両者に呼びかけた結果、公立小学校に通う者の参加が多かったが、ブラジル人学校に通う者の参加もあった。ブラジル人学校に通う子どもは子ども会に参加していない者がほとんどである。普段は子ども会や学校を通して一緒に遊ばない子どもたちも、事業の実施時には一緒に遊ぶことができた。そのため、本事業は両者が交流できる場を提供することができたと言える。

最後に、いくつかの事業を「共生の会」を中心にしつつも、地域産業、行政、町内会、ボランティアなどの連携によって実現するしくみが整えられたことも成果と考えられる。

具体的には、地域の自主防災会による防災学習事業への参加や、料理教室や自然体験学習事業に対する地域の公共施設の活用などは、「共生の会」以外の団体との連携によって実現したものであり、事業の成果がよく示されていると思われる。

#### 4 事業の特質（工夫した点など）

本事業の特質として、第一に子どもたちを対象者にした点である。外国籍の子どもたちにとって、日本文化をはじめ、地域産業、自然に触れる機会が地域で十分に提供されているとは言えない。従来 of 日本文化への理解促進や文化交流を目的とした活動は、サッカー大会や料理教室、ブラジルのサンバ披露に代表されるような母国文化を披露する内容が中心で、その参加者は主に大人である。本事業は、こうした従来 of 活動では子どもたちが取り残されている点に着目し、子どもを対象にした事業を実施した。そのため、子どもたちが主体的に活動できた点が本事業の特質として挙げられる。

第二に、事業の特質として実施場所の大半を西尾市近郊とした点が挙げられる。子どもたちが事業実施後も自らが生活する地域に対する理解を深める、自然を体験する、公共施

設を活発に利用することができるようになることを目的としたため、事業実施後も利用しやすい場所を選定する工夫を行った。

第三に、大学を訪問先に選定した点が本事業の特質である。外国籍の子どもたちの進学率は、日本の子どものそれと比較して、決して高いとは言えないのが現状である。中学を卒業すると親と同じような工場で働く子どもも少なくなく、公立高校への進学は大変な壁となっている。彼らにとって大学はとてまなじみが薄く、外国籍の大学生というロールモデルも身近に少ない。まずは大学を自らの目で見てみるということが重要であると考え、本事業では大学を二回訪問した。大学では、大学生とのふれあいをもち、さらには、ブラジル人大学生の存在を知ることができた。また、大学祭を経験したことから、大学は勉強だけでなく、色々な経験ができることを知ることができた。

## 5 今後の課題

今後の課題として、事業の告知方法や参加の確認作業の改善が求められている。現在はチラシを日本語とポルトガル語にて作成し、個別に訪問・配布している。この方法では、1人で10戸に配布するのに約1時間かかり、より多くの参加者を望む場合、告知だけに大変な時間と人材を必要とすることとなる。また、働いている保護者がほとんどのため、訪問時間と曜日に限られている。そのため、今後、告知方法の改善が必要である。

告知と同様に、参加の確認作業も大変である。当日まで、何度も電話をかけ、参加の確認を取っている。参加希望の場合は連絡をお願いしているが、保護者の方から連絡をもらえるのはほとんど皆無である。また、子ども本人だけでなく保護者から参加希望が伝えられているにもかかわらず、当日のキャンセルは常である。告知方法と同様に、参加の確認作業は改善が求められる。

次に、ブラジル人学校に通う子どもに対する参加呼びかけ方法の改善が求められている。ブラジル人学校のスケジュールを検討し、事業実施日を選定しているが、それでもブラジル人学校に通う子どもの参加率が低い。保護者との連絡も取りにくく、今後は彼らがより積極的に参加できるように、事業日はもちろんのこと、告知方法などを検討することが必要である。

最後に、保護者の参加も積極的に呼びかけてきたが、仕事をしている者が多く、彼らの参加は期待した程得ることができなかった。この点については、保護者の置かれている労働環境に一つの原因があるため、今後の課題として大きな壁となると言わざるを得ない。

総じて、今後の課題として外国籍の子どもたちの保護者の中にリーダーを育成することが、今後の重要な課題であると言える。

## 6 その他参考事項

なし